

実際に防護服を着用して放射線量の高い  
帰還困難区域の現状を伝えたトークセッ  
ション＝11日午前、松山市北久米町



## 被災談 今後に生かして

松山学院高で祈念礼拝

発生から14年が経過した東日本大震災に思いをはせる「3・11祈念礼拝」が11日、松山市北久米町の松山学院高校であった。同校3年の松本清廉さん(18)と愛媛大3年の齊藤葵さん(21)が講話やトークセッションで1、2年生約600人に被災者の体験談や思いを伝え、継承する大切さを訴えた。

震災を忘れないよう、同校では2012年から祈念礼拝を実施。2人は、県内避難者らでつくるNPO法人「えひめ311」などが取り組む伝承プロジェクトに参加しており、23年に岩手、宮城、福島県の震災伝承施設などを訪問した。

齊藤さんは津波について「洗濯機に入れられたようにかき回され、天地が分からなくなった」といった被災者の体験談を紹介。今後生かしてほしいという思いに触れ「過去の話として忘れるのではなく、敬意を持って学ぶことが大事。南海トラフ地震などが懸念されており、家族や大切な人にも学んだことを伝えてほしい」と呼びかけた。

教員ら4人によるトークセッションで登壇した松本さんは、東京電力福島第1原発事故の影響で帰還困難区域となっている福島県双葉町の被災者宅を訪れた経験を語った。「防護服を着用しても30分ほどしか滞在できない。ここまでしないと自分の家に帰れない人が今でもいる」と被害が続いている現状を伝えた。(杉本賢司)

応援と祈り 愛媛から